朝鮮通信使迎接時における宿泊施設と人馬継立に関する研究
—延享度及び宝暦度の彦根を事例として—

建設工学専攻（修士課程）　502133　舛井（ますい）　亮輔（りょうすけ）
建築史研究　指導教員　伊藤　洋子教授

1. 研究の背景と目的

江戸時代を通して善隣友好の関係にあった朝鮮からの来聘者であった朝鮮通信使が寄港もしくは逗留した町は全国に数多く分布している。しかし、通信使に関わる施設について建築史や都市史研究の対象となったのはつい最近のことである。

現在、日韓両国にまたがる通信使関係の歴史遺産を建築史・都市史的に研究し、環境整備のための手法を解明することにより二国間遺産としての政策的な位置付けを行うことが求められている。

本研究では、現存施設を整理した後、具体例として、遺構の多い滋賀県彦根市を題材に迎接施設調査報告及び通信使の往復を可能とした人馬継立システムの解明を行う。

2. 通信使の行路と宿泊施設現存遺構について

朝鮮通信使の日本往復期間は約6～8ヶ月かかり、三使以下 500 人程度の使節のため幕府及び諸藩に課せられる費用も莫大であった。江戸時代に限定すると、慶長12（1607）年から文化8（1811）年までの12回の通信使のうち、2回を除いて漢城（現韓国ソウル）から江戸までを往復した。朝鮮通信使行路を図1に示し、宿泊地及び主な三使旅館の現存状況を表1に記す。

図1　朝鮮通信使行路

通信使の三使宿館となる施設は大別すると寺院か茶屋となる。東海道沿いの宿場町では本陣を使用した例も見られる。この場合の茶屋とは藩主の使う茶屋が大勢であり、海路沿いの都市では新設した場合もある。現存する施設は寺院が主であるが、明治維新以後の敷地縮小等当時の面影を感じられる施設は数少ない。遺構の現存状況が良いのは、鞆浦、牛窓、彦根など西を中心とし、それより東では縮小・改変されたものはあるが、遺構数はかなり少ないといえる。彦根は、陸路では最も遺構の多い都市である。

3. 彦根迎接施設の調査

宗安寺蔵『宝暦13未年朝鮮人御馳走御用御入用積作事方萬仕様帳』より通信使宿泊施設を解明し、現存する3寺を対象に実測調査を行った。

表1　迎接地宿館の現存状況

通信使宿泊地	主な三使宿館	現状
対馬府中	長寿院・国分寺・西山寺	明治以降再建
壱岐風本浦	茶屋・聖母坊・龍宮寺	×
筑前藍島	客館	×
長門赤間関	阿弥陀寺	赤間神宮(明治以後)
周防上関	茶屋	×
安芸蒲刈	茶屋	×（役宅は現存）
備後鞆浦	福禅寺（国重要史跡）	○
備前牛窓	本蓮寺（国重要史跡）	○
播磨室津	茶屋	×
摂津兵庫	絵屋右近右衛門・茶屋	×
摂津大阪	西本願寺津村別院	再建（1962）
山城京	大徳寺天瑞院	×
	本国寺	山科に移転
近江守山	東門院	再建(1986年焼失)
近江彦根	宗安寺	○
美濃大垣	全昌寺	○（縮小）
尾張名古屋	性高院	○（移転縮小）
三河岡崎	茶屋	×
三河吉田	悟真寺	再建（戦後）
遠江浜松	杉浦助右衛門方本陣	×
遠江掛川	摂津守茶屋	×
駿河藤枝	洞雲寺・本陣青島治右衛	洞雲寺再建(大正期)
駿河興津	清見寺(国重要史跡)	19C 建立(山門以外)
駿河江尻	本陣与右衛門方	×
伊豆三島	六大夫方・茶屋	×
相模小田原	七右衛門方・茶屋	×
相模藤沢	源右衛門方・茶屋	×
武蔵神奈川	茶屋（～正徳度）	×
武蔵品川	東海寺玄性院（享保度～）	縮小(明治以後)
武蔵江戸	本誓寺	深川移転
	東本願寺（正徳度～）	寺域縮小

【註記】緊急のための宿泊地及び第4回～6回の日光往還時の宿泊地は除く。

表2　彦根における迎接施設の現状

宿泊者	宿泊施設・図中番号	建立年代	調査期日
三使	宗安寺・④	本堂は元禄15（1702）年 書院は明治期大改修、	H14.12/12, H15.10/07 実測及び文献調査
中官	大信寺・⑦	宝永6年（1706）	H15.10/06　実測調査
下官	明性寺・①	寛政10（1796）年	—
官人荷物	蓮華寺・⑧	明和3（1766）年	—
長老	江国寺・② 善照寺・③	築約50年【聞取】 宝永4（1704）年	— H15.09/09　実測調査
通詞	願通寺・⑥ 法蔵寺・⑤/理応院	天明2（1782）年 現存していない	— —

※上記寺院以外に本町・上魚屋町・元川町・白壁町・紺屋町などの町家町方惣下宿数126軒、対馬藩一行の仮馬屋51ヶ所、代官・手代宿8軒、与力衆宿2軒、使者宿4軒、とあり宗安寺を中心にその近辺に分宿した。

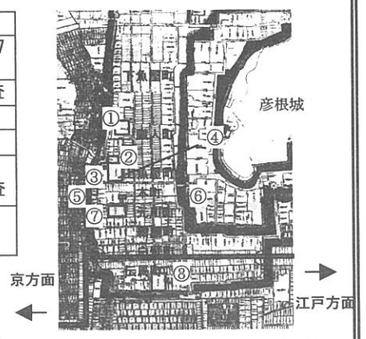

図2　迎接施設分布（『御城下惣絵図』）

3-1　三使宿館宗安寺での宿泊状況

調査施設のうち通信使一行の最高位である三使の宿館であった宗安寺について、当時の宿泊状況を述べる。

宗安寺

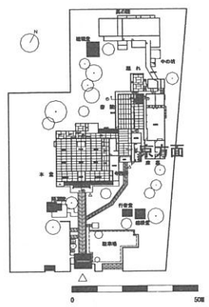

図3　現状配置・平面図

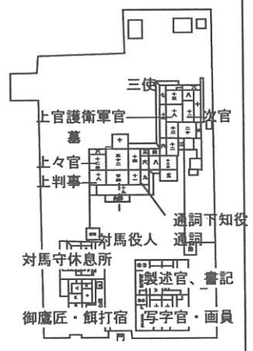

図4　通信使迎接時の部屋割

宗安寺伽藍は迎接当時、本堂・書院・庫裏他に4塔頭が存在しており、それらは明治期に廃庵されたようである。『宗安寺文書』には通信使迎接の際の部屋割りが記してあるが、4塔頭を含むほぼ全ての空間を割り当てている。さらに、最も重要な国書を乗せた輿の置所は最奥に独立した空間をつくることや、仏壇廻りは屏風で囲い幕仕切りすること、湯殿・雪隠の増設や修理、など細部に至るまで指示されている。

4. 人馬継立と伝馬町

江戸時代を通して、大行列の通行を可能にさせた理由は伝馬役と人馬継立制度の充実によるが、各藩による負担は次第に大きいものとなっていった。伝馬役とは「伝馬の提供、またそれに伴う労を提供する課役」である。この制度により行列を最後に遂行した延享5（1748）年の人馬負担数を古文書の分析により表3に示し、次に17・18世紀の状況を図5、表4に示す。そして、多大な人馬負担が宿駅伝馬町の都市構成を変化させていったことを明らかにする。

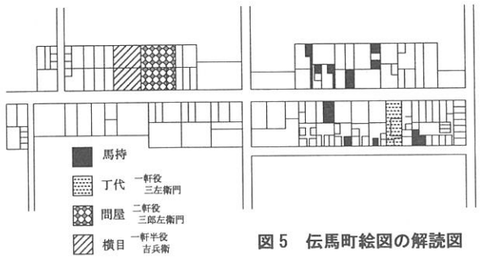

図5　伝馬町絵図の解読図

表4　藩の宿駅助成（延宝～寛政年間）

年代	補助内容	備考
延宝9年(1681)	銀1貫425匁	馬持25人へ(朝鮮人来朝前)
天和2年(1682)	御米75表	拝借
寛保3年(1743)	御米200表	寛保3年より7ヶ年賦　拝借
宝暦9年(1759)	御米30表	頂戴
宝暦11年	御米27表	馬持9人へ　拝借3ヶ年賦
天明年中1781～88	御米50表	問屋役困窮により5ヶ年賦拝借
寛政5年(1793)	御米27表	馬持9人へ　拝借
寛政8年	御米27表	馬持9人へ　拝借

表3 来聘までにおける彦根人馬割【『朝鮮人御用』(延享5年)】

通行日	通行者	人馬触	人馬触内訳
1747年7/5	蓑笠之助（人馬割代官）	33人 12疋	彦根8人、2疋 番場2疋 高宮8人、2疋 鳥居本5人、2疋 愛知川12人、3疋
7/10	薩山外記（人馬割代官）	11人 4疋	
7/15	山本平八（人馬割代官）	25人 3疋	本町7人、伝馬町1疋 番場、4人、1疋 鳥居本4人、1疋 高宮4人、1疋 愛知川6人、1疋
1748年2/10	宿見分役3名	16人 6疋	本町より12人
3/朔(01)	松平主馬 田村織部（大坂御目付代） 往来道筋見分巡見の為	121人 39疋	本町20人 伝馬町13人、9疋 番場18人、4疋 鳥居本18人、5疋 愛知川26人、9疋
3/26	朝鮮人御用掛5名	78人 7疋	本町20人、伝馬町10人 高宮60人
4/18	進上御鷹通行（献上の御鷹、鷹宰領鷹目付衆添役人）	164人 3疋	鷹台持夫—144人 長持持夫—12人 鷹駕替籠持夫—6人 鷹3居持夫—2人 伝馬3疋（荷馬）
4/27	進上御馬通行（献上馬6疋、芸馬2疋）	35人 12疋	口取16人 馬柄杓持8人 水口箱持8人 縄追持3人 荷馬3疋（次中下官用） 乗掛馬3疋（下官用） 荷馬3疋（馬道具用） 乗掛馬2疋（通詞） 荷馬1疋（通詞用）
5/口	朝鮮人御用掛3名	56人 6疋	本町14人 伝馬町1疋 鳥居本番場14人、1疋 高宮14人、1疋 愛知川14人、1疋
5/5	朝鮮通信使一行	532人 1169疋	信使方用260人、600疋 中下官以下187疋 宗対馬守用200人、300疋 両長老72人、36疋 通詞46疋

【註記】「本町」は「伝馬町」の助郷町である。

4—1　考察

準宿駅である彦根伝馬町では、25人、25疋の人馬備えしかないため、迎接には彦根藩領内の4ヶ宿及びその助郷からの提供で補っていた。表4より、宝暦年間には馬持は9人にまで減少しており、1600年代中頃以降にはすでに拝借米金を得なくては宿の運営が円滑に遂行できないことが分かる。なお、宝暦の『朝鮮人御用』には入札の指示記録があり、請負制を採っている。このことは、各藩による人馬継立が困難である状況が窺い知れる。

また、図5より馬持に関しては、借家人が多く裏借家に分布している。困窮していく宿において伝馬役(馬役)を担う主が自身勤めを回避して、裏借屋に住む者達への請負勤めに転化していった結果であろう。

5. まとめ

延享度迎接では伝馬制度を利用し徴発された人馬は、宝暦度に至っては入札制に取って代わり、対馬による一式請負方式となった。宝暦14（1764）年を最後に途絶えた通信使迎接の背景には近世日本の経済状況や伝馬という都市交通機能の衰退が影響している。

一方、迎接施設の残存状況は希少であり、彦根の遺構に関しては復原考察の知見を得た。今後、二国間に跨る文化財として国際交流発展の一つの掛け橋となることを期待したい。

<主要参考文献>
1】「彦根の近世社寺建築」彦根市教育委員会 1983年　2】「佛教文化研究所年報第5号」坪井俊映編 1988年　3】「国宝と歴史の旅⑤」朝日新聞社発行 2000年　4】「彦根の歴史」彦根城博物館　2001年　5】「彦根市史　上・中」彦根市役所　1960年・1962年